北海道大学大学院文学研究院
応用倫理・応用哲学研究教育センター主催

公開シンポジウム

占領と性

本シンポジウムは、日本における占領体験と性の関係について、多角的に考えることを目的とするものです。

占領期の日本では、占領軍将兵を相手とする売買春がさかんになり、売春に従事する女性たちは「パンパン」と名指され、好奇の眼差しに晒されました。そうした女性たちの体験を問い直すと同時に、「パンパン」表象に潜むジェンダーの力学について検討します。

また、ジェンダー・セクシュアリティの観点から、占領体験と戦争体験が語りの中でどのように接合されているのか、「本土」と沖縄の差異もふまえつつ、考察したいと思います。

茶園 敏美（ちゃぞの　としみ）京都大学人文科学研究所人文学連携研究者
「パンパン」といわれた女性たちの生存戦略

斉藤 綾子（さいとう　あやこ）明治学院大学文学部教授
ポスト占領期の「基地の女」

新城 郁夫（しんじょう　いくお）琉球大学教授
戦後沖縄におけるアジアの忘却とホモエロティシズムの領土化

【コメンテーター】
辻 智子（つじ ともこ）北海道大学大学院教育学研究院准教授
種田 和加子（たねだ わかこ）藤女子大学文学部教授

【司会】
水溜 真由美（みずたまり まゆみ）
北海道大学大学院文学研究院教授、応用倫理・応用哲学研究教育センター運営委員

2020年
10/31（土）
13:30～17:00（開場13:00）

参加費無料（事前申込制・定員50名）

シンポジウムの参加には申し込みが必要です。参加申し込みは、応用倫理・応用哲学研究教育センターのHPをご確認ください。
▶HPアドレス
http://caep-hu.sakura.ne.jp/

※新型コロナウイルスの感染状況により、シンポジウムを無観客あるいはオンラインでの実施に変更する可能性があります。

通常開催の場合、主催者側では、感染症対策として、アルコール消毒液による座席の消毒や、会場内の換気を徹底いたします。

北海道大学
学術交流会館・講堂
札幌市北区北8条西5丁目

北海道大学 HOKKAIDO UNIVERSITY
CAEP HOKKAIDO UNIVERSITY

お問い合わせ
応用倫理・応用哲学研究教育センター事務局
Email: caep@let.hokudai.ac.jp
Tel: 011-706-4088（平日 9:15－16:00）
URL: http://caep-hu.sakura.ne.jp
Twitter: @caep_hu

占領と性

公開シンポジウム──2020.10.31 Hokkaido University

【講演要旨】

「パンパン」といわれた女性たちの生存戦略

茶園 敏美

専門は、ジェンダー論、歴史社会学。単著書に、『パンパンとは誰なのか　キャッチという占領期の性暴力と GI との親密性』（インパクト出版会、2014 年）、『もうひとつの占領　セックスというコンタクト・ゾーンから』(インパクト出版会、2018年)。共著書に、『戦争と性暴力の比較史へ向けて』（岩波書店、2018 年）。共編著に、『語りの分析──<すぐに使える>うえの式質的分析法の実践』（立命館大学生存学研究センター、2017 年）など。

本発表は、第二次世界大戦後の占領軍（おもに米軍）による占領地女性を対象に実施された、強制的性病検診を手がかりに、占領兵と親密な関係になった女性たちの生存戦略に注目します。占領期、占領兵と親密な関係にあった日本女性たちは、「パンパン」といわれスティグマ化され、今日に至っています。彼女たちに対するスティグマは重層化しています。そのひとつは、たとえ彼女たちの性的接触が恋愛であっても「売春」の一種とみなされる「娼婦差別」であり、もうひとつは、「戦勝者に寝返った女」という被占領地のひとびとからの侮蔑的な視線です。占領という圧倒的な非対称の権力が作用する状況のもとで、限られた選択肢の中、占領期を生き延びてきたサバイバーとしての彼女たちの多様な生存戦略に注目することで、いまだに沈黙を強いられどんどん亡くなっている彼女たちの名誉回復の糸口としたいと思います。

ポスト占領期の「基地の女」

斉藤 綾子

専門は映画理論、特にフェミニズムや精神分析理論とジェンダー分析を中心とする。共編著に『映画女優　若尾文子』(みすず書房、2003 年)、『男たちの絆、アジア映画』（平凡社、2004 年）『映画と身体 / 性』(森話社、2006 年)、『横断する映画と文学』(森話社、2011 年)、"Occupation and Memory: The Representation of Woman's Body in Postwar Japanese Cinema" (The Oxford Handbook of Japanese Cinema, 2014)『人種神話を解体する1可視性と不可視性のはざまで』(東京大学出版会 、2016 年)、『敗戦と占領』（臨川書店、2018 年）など。

本発表では、連合軍による占領が終った翌年 1953 年から 60 年安保前後のポスト占領期に焦点を当て「パンパン」と呼ばれた女性たちの映画イメージの変遷を辿ることで、民主主義とドメスティック・イデオロギーに直結する女性運動が内在していた戦中からの連続性と、敗戦の負の遺産として戦後復興する日本社会から排除される女たちの分断が、いかにポスト占領期日本が抱えた矛盾を先鋭化しつつも、占領の現実の転位と隠蔽を可能にしたかを確認します。参照するのは『赤線基地』(1953 年)『慾望』(1953 年)『女の防波堤』（1958 年 ）『ゼロの焦点』（1961 年 ）だが、これらを結ぶ線の中に「立川基地」を巡る反基地運動の映像と言説を位置づけて考察します。

戦後沖縄におけるアジアの忘却とホモエロティシズムの領土化

新城 郁夫

専攻は、沖縄文学、日本近代文学、クイア研究、ポストコロニアル研究。著書に、『沖縄文学という企て』（インパクト出版会、2003 年)、『沖縄を聞く』(みすず書房、2010 年)、『沖縄に連なる』（岩波書店、2018 年）など。

この発表においては、敗戦・米軍占領開始直後の一九四九年に沖縄で書かれた『黒ダイヤ』（太田良博）という小説を取り上げ、そこに見られるホモエロテイックな情動が、「戦後」沖縄におけるアジアとりわけ東南アジアの忘却という記憶の政治に連動していくさまを考察していきます。その際、インドネシア独立運動に加わっていく親しい少年への情愛を哀惜のうちに語る日本軍敗残兵となった「沖縄人」男性の語りのなかに、日本そして沖縄そのものの植民主義の隠蔽と占領アメリカ軍の空白化が共起的に開示されていくことを検証していきます。

【コメンテーター】

辻 智子

専門分野は、青年期教育論、女性史。主著に『繊維女性労働者の生活記録運動：1950 年代サークル運動と若者たちの自己形成』（北海道大学出版会、2015 年)、「生活・地域の復興と青年」（日本社会教育学会編『東日本大震災と社会教育』東洋館出版社、2019 年)、「記録と教育研究─社会教育実践の視点から」（日本教育学会編『教育学研究』2015 年 6 月）など。

種田 和加子

専門分野は、日本近現代文学。著書『泉鏡花論─到来する「魔」』（立教大学出版会、2012 年)。近年の論文、「異界をつむぐ─屋根裏・絵本・語る声─」（『昭和文学研究』2019 年 9 月)、「風変わりな少女「小公女」の変遷：若松賤子から伊藤整まで」（『藤女子大学国文学雑誌』2019 年 3 月)、「高橋たか子「亡命者」論─「プスチニア」をめぐって─」（『藤女子大学国文学雑誌』2018 年 3 月）など。

北海道大学 HOKKAIDO UNIVERSITY　CAEP HOKKAIDO UNIVERSITY

お問い合わせ　応用倫理・応用哲学研究教育センター事務局
Email: caep@let.hokudai.ac.jp　Tel: 011-706-4088（平日 9:15－16:00）
URL: http://caep-hu.sakura.ne.jp/　Twitter: @caep_hu